

生徒を引率中(指導中)に経験したヒヤリ・ハット事例集 (転滑落・落石)

独立行政法人日本スポーツ振興センター国立登山研修所

※ この事例集は、平成29年度に開催した高等学校等安全登山指導者研修会の事前課題で研修生の皆さんから収集したヒヤリ・ハットの主な事例と対応についてまとめたものです。場所や人が特定されないように、修正を加えたものです。

キーワード	事例	対応、その他
転落	夏山合宿の最終日、下山中、男子部員が登山道から足を踏み外し、20mほど下の沢に転落しそうになる。咄嗟に立木に捕まり、転落を免れた。	最終日で、早く下山したい焦りや合宿からの開放感から、注意散漫になったことがその要因と考えられる。安全な場所まで移動し、一息入れると共に注意喚起を行った。
転落	夏山合宿で下山途中。参加生徒4～5名。顧問2名。自分の前を歩いていた生徒が、登山道の谷側の草むらを踏み抜いて転落。	生徒は、崖にしがみついていたので、手を出して生徒の手をつかむことができた。しかし、自分の力で引き上げることができない。他の生徒に前を歩いている顧問に連絡するように指示。しばらくして前の顧問が来て、引き上げることができた。
転落	引率教員の一人が、鎖場を下降中に1m程度転落して、鎖場の取付きに仰向けに転倒する形となった。擦り傷で済んだのが幸いであった。足下の岩角が出っ張った形状の場所で足場が見えず、足の感触から、充分足がかりがあると誤認したのが原因だった。	擦り傷程度だったので、その場で洗浄と応急手当を行った。部の予算でのヘルメットの装備化を提案準備中。しかし、学校は登山経験の無い人が大多数なので、校内でもヘルメットの必要性はあまり認識されていない。部の活動では、鎖場の通過法の講習を行うようになった。
転落	小屋の屋根が隠れるほどの積雪。踏み跡に注意していなかったため、雪を踏み抜いて地面に落ちそうになった。幸い、すぐ隣にいた者が腕をつかんで引き上げてくれたため落下は免れた。	踏み跡には注意をするべきだったと学んだ。
滑落	雪山を下山中、顧問が足を滑らせ転倒。その弾みで下にいた生徒が足元をすくわれ滑落し、反動で空を飛んだ。	幸いにも雪上に落下したので、打撲もなく行動を続けた。少し手前であったら岩の上に落下していた。
滑落	大会中、生徒が渡渉中に雪の下に隠れていた笹で滑り転倒、そのまま転がり滝からシュルンドに落下した。	顧問が滝つぼに降りし本人を確認。気を失っていたが、ほどなく回復し、普通に会話できる状態であった。ロープで補助しながら自力で登山道まで上がってきたが、足の痛みを訴えていたため、この後の行動は無理と判断し、救助要請。県防災ヘリでピックアップし、麓の病院に収容した。大きな怪我もなく、保護者と帰宅した。
滑落	急傾斜をジグザグ状にトラバースする登山道の下りで、生徒の一人が足を踏み外して笹藪の斜面を3メートルほど滑落した。	生徒は自力ではい上がり、怪我はかすり傷程度だった。その後は歩行の速度を落とした。
滑落	下山中の作業の方とすれ違う時、作業員が道の上方の大きな岩の上に立ち道を譲った。その下を女子生徒が通過中、岩が滑り出し生徒が巻き込まれる。幸い、数m流されたところで止まり事なきをえた。	生徒が興奮状態となり泣き出したが、しばらくすると落ち着き山行を続けることができた。
滑落	台風が日本列島に接近中で、雨や風が強まることが予想された。雨の場合、下山ルートがたいへん滑りやすくなることが予想された。	前日の内に雨の場合の短縮ルートを想定し、全員で共有しておいた。登山当日は雨だったため、短縮ルートを使い、時間も早く切り上げた。
滑落	下山中、1名が足を滑らせ、滝つぼに滑落した。他の1名が慌ててザックを背負ったまま滝つぼに飛びこむも2名ともしばらく浮上しなかった。	別のもう1名がその様子を見て滝つぼの縁まで慎重に降りロープを投げ入れ、浮上してきた2名を確保した。救助者は焦らず自己の安全を確保してから救助体制をとることが肝要。
滑落	縦走中、悪天候の中、地図上にはない大きな雪渓が残っていた。それほど傾斜ではなかったが、トラバース中に一人の生徒が足を滑らし、別の生徒を巻き込んで20mほど滑落した。幸い大事には至らず、擦り傷程度で済んだ。	すぐに救急セットから消毒薬を取りだし、擦り傷を消毒し、カットバンを患部に張った。天気も悪かったので、縦走を中止し、近くの避難小屋に避難した。翌日はエスケープルートで下山した。
滑落	12月末、上りでのできごと。凍結した滑め滝左岸の通過時に1名が滑落し、直後を歩いていた1名が巻き込まれて滑落した。アイゼン(4本爪)装着直後のできごとだった。怪我とずぶ濡れの可能性もあったが、小さくならかな滝だったので途中で停止し事無きを得た。	山側に張ってある固定ロープを使って一人ずつ通過させた。また、アイゼン・ストックワークを確認し直した。また、下りでは、10本爪アイゼンに履き替え、爪を引っかけて転倒しないように歩行した。ほぼ同じ時期に、数km離れた〇〇沢で滑落死亡事故が起きた。凍結した沢の通過には細心の注意が必要であると肝に銘じた。この後、この山域の冬に適した6本爪アイゼンを全員分そろえた。
滑落	総体予選の下山のこと、雪渓上には、しっかりとロープや、トレースを刻み、沢山の選手たちが、通過するのを待っていた。我々顧問と一緒に支援をしていた生徒の一人が、雪渓を50mほど滑落し、緩やかなところで止まった。	支援隊の生徒たちの安全確認をさせずにいた。そのため目を離れた途端に滑落した。雪渓上のことであつという間の出来事だったので止めることができなかった。幸い、緩やかな斜面で止まったので胸を撫で下ろした。腕の痛みがあつたので応急手当をして、病院に連れて行ってもらった。
滑落	下山中、生徒一人が勝手な行動をして、ルートから外れ、ロープや鎖がない2mほどの高さの岩場をジャンプして下りようとしていた。	高さのない場所へ移動させ、そこから、ゆっくりと岩にへばり付く形で下ろさせた。
滑落	下山時、右足に全体重をかけ、そして曲がったままの状態ですり足で下山道を道沿いに約2m滑り落ちる。原因は、トレーニング不足のため、体力も尽きてしまい、自分の体を支えられなかったことにある。	どうしようもなく、見守るしかなかった。右足首、右ひざ捻挫のまま、時間をかけて自力下山させた。翌日の登山は当然中止で即帰宅。本人の申告に嘘があつたため、事前に登山不適の判断ができなかった。
滑落	稜線の尾根道を歩いているときに、歩行していた生徒がヤブを踏み抜き、2mほど滑落し、姿が見えなくなった。比較的手入れが行き届かないルートなので、足下の刈り払いが不十分で、よく見えなかった。	急斜面であつたが、雪崩斜面の上部で、草木が生い茂り、それ以上滑落する可能性がない場所であつた。すぐに自力脱出した。
滑落	30時間不眠不休の長駆歩行時に滑落事故発生。明け方にガードレールの無い箇所から3m滑落。	リュック側から着地したため、軽度打撲で済んだ。また、帽子を着用していたため、頭部への外傷なし。当該生徒は30kmの夜間予備歩行に参加していたが、本行事が過酷だったと考える。

キーワード	事例	対応、その他
滑落	頂上直下で、自分の後ろに登らせていた生徒が、つかむなど言ったにも関わらず、古いフィックスロープを両手でつかんだところ、支点となっていた木が朽ちていて、丸ごと抜け、5～7m転滑落した。頭部から出血していたが、幸い、意識もあり、足などの怪我もなかった。	全身の確認をした。出血している頭部は消毒と直接圧迫、その後三角巾で保護。休憩後、自立歩行が可能だったため、下山した。途中、携帯電話が使えたので保護者に連絡、登山口まで迎えに来てもらう。頭を打っている可能性があるため、脳外科で検査をするようお願いした。
墜落	スポーツクライミングの遠征練習で、リードクライミング練習中の際、生徒が5.11aのルートのコア部(高さ9～10mほど)の突破に気をとられるあまり、クリップ(クイックドロ-2つ分)を忘れて、そのままトップまで登ってしまった(パンプしそうになったのでそのままトップまで突っ込むと判断した模様)。ビレイヤーから危険な行為を咎める声は聞かされた。引率者は、別の生徒の指導で反対側の壁の生徒に注意を呼び掛けており、気が付いていなかった。事が発覚したのは、登り終わった生徒からの報告があったからだった。	落下係数が大きければ墜落距離が長くなり、事故につながる危険なケースである。生徒には、墜落防止処置と命を守ることに ついて徹底した指導を行い、リードクライミングはそれがよく分かったう えで練習を開始する(何より安全第一。「注意一瞬、怪我一生」の注意喚起徹底)。ビレイヤーがクライマーの安全を確認しながら確保するという、基本中の基本が身に付いて無かったため、ビレイヤーの確保練習をしっかりと行い、常にクライマーの動きに声をかけを行う。クライミング中は複数の目でお互いを確認しあい、事故につながりやすい行為が始まる前や、危険が察知された場合は、すぐに注意を与えあう。指導者は常にクライマーの動きを注視し、できれば複数の指導者で指導にあたる。
墜落	スポーツクライミング練習中、ビレイヤーが話(または他のこと)に夢中になっていて、クライマーの8ノットとカラビナの安全確認を怠った	普段からお互い声をかけ合い、確認し合うことを徹底的に教え込んでいるが、『慣れ』が確認を怠る最大の原因である。横で見ている気付いた時は、直ちにビレイヤーに声をかけ確認を行う。確認が取れない場合は、クライマーにも確認を行う。強制的にクライムダウンさせる場合もある。
墜落	登攀中、残置ハーケンにカラビナ、ロープをかけたトラバースして自己確保し、後続者が登攀するため余分なロープを手繰りよせたところ、残置ハーケンが真横に引かれて抜けた。	残置ハーケンには上下の荷重には耐えたかもしれないが、ハンマーで確認すべきであった。トラバース中に横への力がかかりハーケンが抜け、かつ足を滑らしたならば墜落した可能性があった。
転倒	新人登山大会に向けての現地見(9月下旬)での下山時、雨天に見舞われ、コース状態が泥状となり、やや急斜面のところ(展望がはっきりしているところ)を慎重に歩いていたが、生徒一人が尻餅をついてしまった。	当該生徒はとっさに両手でフォローできたことから、雨具は泥で汚れたものの、柔らかい土壌であったこと、草地でもあったことが幸いし、特に怪我もなく下山することができた。(下山時は精神的不安を少しでも取り除くよう、もう一人の生徒と声を掛けてやりながら下山)
転倒	高差の大きな段差を下るとき、前向きだったため、ザックの底をぶつけ、頭から転倒しそうになった。	大きな段差では後ろ向きに下るように注意。
転倒	経験の浅い学生が縦走からの下山中にバテてしまい、大幅に速度が低下した上、注意散漫になって登山道の谷側の路肩を踏み、路肩が崩れて谷側へ転倒した。緩傾斜地で軟らかい土の地面だったのが幸いして、怪我は無かった。	バテた本人の荷物を他全員が分散して持ち、本人を空身にした上で、引率教員と経験豊富な学生(副部長)の間に入れ、注意しながら下山した。結局2時間遅れとなったが、時間的余裕があったので対応できた。普段の活動において、体力作り、歩き方や危険箇所の見分け方などの基本的な技術面を重視するようになった。
落石	沢のつめで乗用車大の岩に手をかけると、その岩が後続に向かって落ち始めた。	落ち着いて避けるように伝えた。
落石	岩場の登りで、岩が剥離し、生徒の頬をかすめて落下した。	現場で落石が生じたことへの注意を喚起した。
落石	春季大会中(4月)、九十九折となっている道を歩行中、先頭教員の3人後ろの生徒が、登山道を通じた時、足元の石(直径20cm～30cmほど)が崩れ、谷側へ転がる。石の転落先に生徒が2人いたが、登山行動中の対処法に従い、「ラクッ」「危ない」「避けろ」「石」「○○(生徒の名前)」などと叫び(先頭教員が覚えている限り、他の生徒や教員も叫んでいたように思う)、生徒は石を避け被害は出なかった。	登山行動のたびに歩行や落石などに関して注意喚起を行っていく。今回、実際に落石が起こったときに正しく対処ができたが、これからは注意を喚起しながら指導にあたる。これまでの登山専門部の活動で、教員間での指導内容の共有化と、その内容が生徒へ浸透していた結果が確認できたが、今後も安全な登山に向け歩行技術の向上にむけ、更に取り組んでいく。
落石	下山中、生徒がこぶし2つ分くらいの落石をした。また、ほぼ同じ場所で顧問が1mくらい滑り落ちて、脚をすりむいた。	落石は誰にも当たらなかったが、ヘルメットはかぶっていなかったため、レンタルでもヘルメットは使用するべきであった。顧問は山荘で治療した。また、下山の注意はしたが更に細かく注意するべきであった。
落石	つづら折りの登山道を隊列を組んで下山中、上部(後方)を歩行中の生徒が不注意でソフトボール大の浮石を落下させた。落石は幸いにも下部の道を歩いていた生徒の間を抜けたためけが人はなかった。	「ラークッ!!」と大声で注意喚起。
落石	春季大会で先導していた私の2人後ろの生徒が九十九折の登山道を通じた際、浮石と思われる小さくはない石が落下した。生徒の列も九十九折になっており、複数の生徒に被害が及ぶ可能性が大きかったが、「ラク」や「危ない」「避けろ」と各々で叫び何とか事なきを得た。	九十九折直前に谷側に小石を落とさないように注意して歩くことを注意喚起したが、具体例を示しながら指示することと、落ちてくることがあるということも指示するようにしたい。
落石	8月初め、下りのできごと。メンバーの一人が落石を起こし、先を歩いていたメンバーの体をかすめて人頭大の石が落ちていった。大事故に繋がりがかねない一瞬だった。ルート外だったので、下には幸い登山者がいなかった。	先頭が、ルートを外れて浮き石の多い場所を下ったために起こった落石だった。落石原因を全員に説明し、正規のルートに戻って下り直した。特に、体力があり勢いで下りがちなメンバーには慎重な歩行を促した。
落石	急斜面を下山中、後方(上部)にいた生徒が落石を起こし、前方(下部)にいた生徒の腕に当たった。	その場で落石を起こさない歩行について指導。